

九州沖縄土を考える会秋期研修会を開催しました。

2025年9月26日



周辺は「島原半島ユネスコ世界ジオパーク」に認定された地域

九州沖縄土を考える会は、9月2日(火)・3日(水)に【土壌の本質をつかむⅣ長崎編】と題した研修会を長崎県雲仙市で開催しました。1日目の現地研修は、雲仙市小浜町の藤本農場様ほ場(年2作のジャガイモ栽培を60年間続けながら連作障害無し)で土壌断面調査とモノリス採取を行いました(詳細は「前島先生のひとくちメモ」参照)。

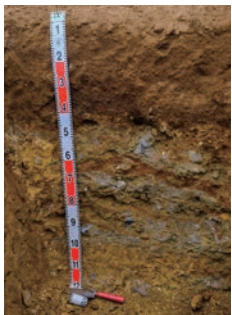


牧野会長



藤本さん

雲仙市小浜体育館内会議室に移動しての座学では、農研機構 農業環境研究部門 前島勇治先生から前回調査を行った火の国ファーム(熊本県菊陽町)の断面調査報告があり、報告後にモノリスを贈呈された本田さんは、満面の笑みで「親たちからの仕事の歴史が詰まっているので、家宝にします」と受け取られました。調査報告に続き、登壇した帯広畜産大学 谷 昌幸教授の講演では、「なぜ連作障害なく栽培し続けられるのか」「なぜこの収量が得られるのか」「もっと収量を上げるにはどうしたらいいのか」といった疑問に対して、藤本さんが経験から得てきた実践を科学的に裏付ける内容となり、参加者の土壌と栽培に対する理解がさらに深まる機会となりました。2日目は、就農5年目にして初めて乾直に取り組んだ佐々木さん(雲仙市国見町)のほ場を視



前島先生の断面ひとくちコメント 長崎県雲仙市小浜町 藤本農場(前作:パレイショ)

島原半島西側の棚畑(段々畑)で年2回パレイショ栽培されているほ場の土壌断面です。この辺りでは古くは島原の乱の頃から棚畑が作られ始め、約30年前の大規模な基盤整備により現在の棚畑になったとのこと。基盤整備時の表土戻しにより深さ45cmで土層が画然と分かれ、作土層はロータリー耕による第1層(0~15cm)、プラウ耕による第2層(15~30cm)、ハーフソイラの施工跡が残る第3層(30~45cm)と細分されます。また深さ45cm以深の縞々の土層は安山岩の礫や火山砂・粘土の互層で、かつて雲仙火山から泥流が数回にわたって押し寄せてきたことがわかります。この砂礫層の存在により有効土層は45cmと制限されますが、作土層の土性は壤土(L)、第2層と第3層の土塊も大きく、断面を通じて透水性・排水性は良好です。現在は明渠を整備すると共に、ハーフソイラ施工によって地表面の余剰水を速やかに下層へ浸透させ、梅雨時の豪雨に伴う表土流亡や過湿による病害を防いでいます。



前回ほ場提供者の本田さんへモノリス贈呈



察しました。一般的な乾直と水を引くことができないほ場での乾直も実践され、それぞれの根の違いを観察したり、雑草の発生状況のお話し等を伺いました。

夜の情報交換会を含めて親睦も深まり、実りのある研修会となりました。



畑でしか見られない雑草に苦慮している水無しほ場(左)と、入水して栽培しているほ場(右)



定年を機に就農した佐々木さん